

特別報告

(一) 東日本大学史連絡協議会・西日本大学史

担当者会 一九九四年度合同研究部会

今年度で三回目を迎える東日本大学史連絡協議会・西日本大学史担当者会合同研究部会は、一九九四年十月五日から七日までの三日間、西南学院広報・調査課の皆様の手配で、福岡において開催された。今年度の参加校は、オプザーバー校一校を加え、東西あわせて四三校、参加者数は個人会員も含めて七三名を数え、当史料室からは上野室長、若山助手、寺西が出席した。

三日間の日程は、―十月五日は西南学院における基調講演(一)と福岡市博物館での研修、および、九州会館福岡ガーデンパレスに場を移して研修懇親会。翌六日はガーデンパレスにおいて基調講演(二)とパネル・ディスカッション。七日は観世音寺、九州歴史資料館を訪ね、初日の基調講演(一)に対応した研修見学―であった。

初日は西南学院大学本館四階大会議室において、西南学院広報・調査課の芳永 弘課長の司会により開会。同志社社史資料室の河野仁昭室長の開会の辞に続いて、西南学院大学の田中輝雄学長の挨拶があり、基調講演(一)に移った。「考古学資料と整理について」と題して、西南学院大学の高倉彰教授に講演していただいた。先生はまず考古学の定義から始め、手元にある史料から元の姿を復元するという作業は大学史においても考古学の手法と同じであるとして、当日配布資料に沿って、瓦によって年代を特定する方法を大宰府遺構をモデルにお話になった。考古学の特徴はもの言わぬ史料から歴史を復元することにある、もの言わぬ史料に語らせることが解釈を加え、意味を与えるということになる。ここでいう瓦は考古資料を実際の史料に置き換えれば、この作業はとりもなおさず歴史学の手法と一致する、ということであった。次に訪れた福岡市博物館では、まず一階の講義室において学芸課の野口 文氏より博物館の紹介とビデオを使つての展示室、収蔵庫内の説明をうけた。四年前にできたこの博物館は博多湾の埋め立て地に建てられ

ているため、潮風対策が一番の問題であり、建物全体の位置や荷物搬入口の向き、風よけのための二重扉、空調や壁面の工夫等、細かな点に気を配っている、とのこと。またこは展示博物館であると同時に研究施設でもあるので、博物館外の研究者のためにも施設利用の上で何かと便宜がはかられているようである。それから野口氏の案内で館内を見学し、その後二階の常設展示室を個々に見て回った。午後六時から福岡ガーデンパレス三階の一室において研修懇親会がもたれた。会は神奈川大学資料編纂室の澤木武美氏の司会、明治大学歴史編纂事務室事務長の内河久平氏の開会挨拶、梅花学園資料室課長の遠藤トモ氏による乾杯の音頭に始まり、相互の親睦を深めた。この間、参加各校代表者全員の挨拶があり、最後に同志社の河野氏が、この東西合同大会が将来全国組織となり国際組織となることを望む、と締め括られた。

二日目は福岡ガーデンパレス三階会議室において基調講演(一)とパネル・ディスカッションが行なわれた。福岡大学商学部教授・藤本隆士先生による講演は「日本の近代化と高等教育―大学史をみつめて―」と題され、日本の近代化が日本の教育の中でどのような意味を持っていたのか、また外からの刺激を受けて発展した内側の条件は何であるかを中心に論じられた。日本の教育学制制度には初めから「富国強兵」が示す二つの流れが存在したが、このうちの産業資本育成のための実業教育が日本の近代化を支え、これらの専門学校が戦後、大学の中心になっていくところに日本の特異性がある、ということであった。講演を受けて質疑応答が行なわれ、現在の大学教育には「哲学」が欠落し、学問のバランスが欠けているという指摘もなされた。

午後からは中央大学の松崎 彰、中川壽之両氏の司会で「大学史資料の収集と活用方法」を統一テーマに掲げたパネル・ディスカッションが行なわれた。パネリストは福岡大学総合研究所の後藤正明氏、日本女子大学成瀬記念館の秋山俱子氏、梅花学園の遠藤氏であった。まず後藤氏から「福岡大学の大学史」というテーマで、大学の沿革、大学史発刊・年史編纂室の沿革、資料の収集・整理・保存の方法について、苦心談も交えながらの報告があった。しかし現在の分類は暫定的方法なので、なお合理的な整理法を検討中であると言い、今後の課題として、資料収集を絶えず心掛けることと共に専用の収蔵庫を得ることを挙げられた。秋山氏から「展示で知らせる学園史」というテーマで展示の実状についての報告があった。まず成瀬記念館のビデオを用いて展示の様子を紹介し、それから配布資料によって企画展について説明された。展示をする上で重要な点は、主題をしぼることとどのような名をつけるかの二点。

絵画展も注目を集めやすいものであり、また企画の度に調査を行なうので資料もその都度集まる、とのことであった。遠藤氏は「梅花学園資料室の資料活用の事例」を紹介し、やはり、展示のための調査・研究によつて新しい資料が得られる、と話された。以上の報告を受けて質疑応答が行なわれ、閉会予定時刻を大幅に越える熱心な討論となった。特に、情報交換の問題に話題が及んだ時、史料収集に際しては明確な目的を持つことと自分たちの学校のためだけではなく日本の教育界の役に立つというつもりで臨むこと、との発言に会場内から賛同の嘆声があがった。最後に同志社の河野氏がこの討論を総括して、ディスカッションは終了した。

最終日は福岡ガーデンパレス前からバス二台に分乗して太宰府観世音寺へ向かった。九州歴史資料館副館長・石松好雄氏の解説により、観世音寺の本堂、僧房跡、国宝の梵鐘や仏像を見学し、また九州歴史資料館の見学した。九州歴史資料館の特色は、大宰府史跡関係の調査を行なっていること、考古学関係のほかに美術工芸の分野の展示があること、発掘調査による最新資料を展示していること、という、他の博物館には例を見ないものである。会議室において説明を受けたあと、未整理庫で発掘された土器などの破片の取り扱い方を、復元室で実際に復元作業をしている所を、見せていただいた。次に本館裏の別棟にある図面室に行った。復元した出土品の完全な報告書にはその図面を添附しなければならないが、図面を作る作業は復元作業よりも年季のいる仕事であるという。一回り見たあと会議室に戻り、写真の整理についてお話をうかがった。フィルムは種類、サイズによつて分類し、年度毎に通し番号をつける。フィルム分類別に基本台帳を作成し、必要事項を記入する。写真は事項別に分類した基本アルバムに貼りつける。整理したフィルムの選択をより簡単にするために、調査毎、遺跡別、所有者別の索引カードを作成する。コンピュータは使っていないとのこと。また資料の貸出にはネガ・コピー（デュープ）を作成し、コピーをつけて掲載許可をとった上で貸し出し、保存についてはこれと違って特別なことはしていないが、デュープを作成することでフィルムの劣化に少しは対応できる、とのことであった。

太宰府天満宮附近での昼食（自由散策）のちバスで博多駅または空港まで送っていただき、帰路についた。

今回の合同研究会の担当校、西南学院の皆様をはじめ、毎回ご尽力下さる東西幹事校の皆様のおかげで充実した三日間に恵まれたことを感謝して記録にとどめたい。

（寺西 裕加恵）